

完結すれば全十一巻よりなる予定の『東京芸術大学百年史』のうち、音楽学部に関係のある巻としては、五年前、すなわち東京音楽学校創立百周年の年に『東京音楽学校篇第一巻』、二年前に『演奏会篇第一巻』が出されましたが、それらに続いて今回、『演奏会篇第二巻』が刊行できる運びに至り、喜びに堪えません。

『演奏会篇第一巻』では、明治二十年代にささやかに始められた当時の演奏会が、次第に規模が拡大され、内容が充実し、ついには本格的な形のものに発展していく過程が記述されていましたが、今回の『演奏会篇第二巻』は、昭和二年から二十七年までの二十五年間（一九二七―五二）における東京音楽学校の演奏関係の記録が扱われています。例えば、外人指揮者ラウトルップの後任として着任したクラウス・プリングスハイムがマーラー、ストラヴィンスキー、リヒャルト・シュトラウスなど、当時日本ではあまり知られていなかったヨーロッパ近代の重要な作曲家たちの音楽をいち早く紹介し、学内外に新風を吹き込んだ様子などが、演奏会批評、写真などの関連資料とともに、記載されていますが、これなども日本における西洋音楽の受容史を研究しようという人々には重要な資料であると同時に、一般の音楽愛好家にとっても興味ある読み物となるでしょう。

なお、本書の編集に多くの時間と労力を費やして下さった編集委員の方々、また出版に際して並々ならぬご助力をいただいた音楽之友社の浅香淳社長に心からの御礼を申し上げます。

平成五年一月

東京芸術大学音楽学部長 原田茂生